

私の自信はどこから

富岡市立西中学校

二年 岡部 桜子

「吹奏楽部は楽でいいよな。」「簡単そうだよな。」
吹奏楽部に入部して間もない頃と同級生からの言葉で
した。

・・・そうか、みんなにはそんな風に見えているん
だ・・・。

その時の私は、猛反発したい思いを持ちながら、そ
う思われてしまうことに、ただ心を痛めていました。

中学校入学前、友達に誘われた運動部と大好きな音
楽をやる吹奏楽部と、どちらにするか迷ってしま
した。最終的に部活動オリエンテーションでの吹奏楽部
の迫力ある演奏が決め手となり、「運動部もあこがれ
るけれど、それ以上に音楽をもっと知りたいし、心を
打つ演奏を私もしたい！」と吹奏楽部入部を決めまし

た。

基礎から学び、徐々に演奏が形になっていくにつれ
て、吹奏楽への思いはどんどん高まっていきました。

けれども、入部してよかったなと思う一方で、気持
ちのどこかで同級生の何気ない一言をいつまでも引き
ずる自分がいて、「何部に入ったの？」と聞かれる場
面でも、胸を張って「吹奏楽部です。」と言えない自
分がいました。

入部から四ヶ月経った七月下旬、初めて挑んだコン
クールで私のそれまでの迷いが一変しました。コンク
ールは、どの学校も金賞を狙います。勿論私たちの目
標も金賞で、「取れる！」と信じていました。しかし、
審査発表で告げられたのは「銀賞」・・・。日頃の成
果を出し切れたと思っていた私は耳を疑いました。不
安になって、恐る恐る周りを見渡すと、三年生が泣き
崩れて、いつもは力強く頼もしい男子の先輩も肩を
振るわせて静かに泣いていました。

私は思い出していました。それぞれのパート練習、
合奏、それを幾度となく繰り返し、顧問の先生が不在

の時は、三年生の先輩が自分のこともしながら後輩たちを一生懸命仕切って引っ張ってくれたこと。先輩の流すその涙で、私が入部する前の先輩たちの努力し続けた姿も改めて見えた気がしました。

そして、「金賞」の壁は、本当にとっても高くて容易くはないんだなと思い知った時、私のそれまでの迷いに対して怒りがこみ上げてきました。同時に、自分の目で見てきたものではなく、誰かの目に見えているものに心を痛め、自信を無くしていた自分が急に悲しく思えました。

確かに、汗は運動部ほどかかないし、帰宅後の疲労感も運動部に比べれば少ないと思います。けれども、先輩たちの挑戦や、私が先輩方のレベルに追いつこうとした毎日は、決して恥ずかしいものではないし、何より自分たちが心を一つにして奏でる音楽に引け目を感じることなんて一つもない。そして、自分の選んだ道から目を背けたことで、大好きな音楽を自分自身が否定していたんだとようやく気づきました。

「吹奏楽部は簡単だったか、楽だったか」それを正

当に判断できるのは、それを経験した未来の私しかいません。私以外の誰かではなく、私自身です。誰かの声に左右されて、自分の思いまで上書きや訂正をしまえば、前に進むうとしている私が悲しみます。誰かのせいにして立ち止まることや自信を無くすことこそ「簡単」であり、「楽」なことで、それが自分の歩みを遅らせるのだと気づきました。

この先も、日々何かの競争をしていく私たちです。私は、人より自分がではなく、今日の自分が昨日の自分よりも頑張っているか、成長できているかを気にする私でいたいのです。その積み重ねが最終的な目標達成や自信に繋がると思うからです。

「他人（ひと）は他人、自分は自分だよ」私が小さい頃、誰かと自分を比較したり、羨ましく思ったりした時に、母によく言われた言葉です。何かを求めるのが私なら、挑むのも乗り越えるのも振り返るのも、そして、自信をつけてあげられるのも私です。

唯一無二の自分を一番近くで見ている「私」が、これからも応援し続けて、自分をもっと輝かせたいです。